

漁獲量が増加していることがわかります。これは、漁獲量の急増と同時にサワラの分布域が北に広がったことを示しているものと考えられます。

1999年を境に日本海側での漁獲状況が急変していることから、その前後において、日本海のサワラ漁獲量配分がどのようになっているのかを、次のような方法で調べました。1980年から1998年までの期間と1999年から2001年までの期間において、日本海を山陰海域

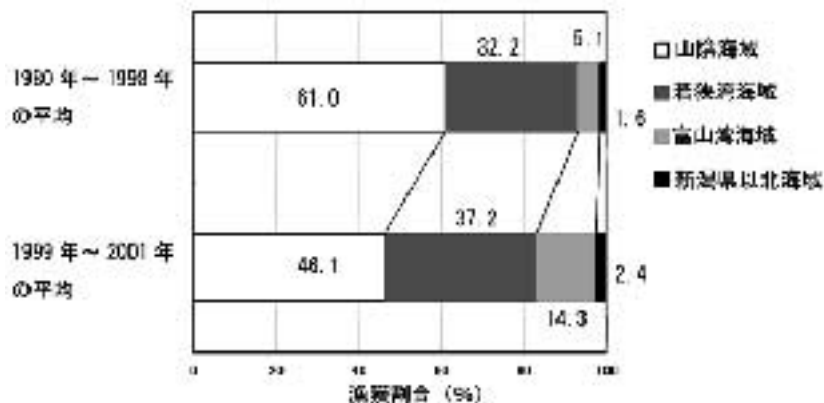


図10 サワラ海域別漁獲割合の変化

(山口県、島根県、鳥取県、兵庫県)、若狭湾海域(京都府、福井県)、富山湾海域(石川県、富山県)及び新潟県以北海域(新潟県、山形県、秋田県、青森県)の4つに区分して、それぞれの海域のサワラ漁獲量が日本海全体のサワラ漁獲量に占める割合を比較してみました(図10)。この図を見ると、山陰海域での漁獲割合が減少している一方で、若狭湾海域、富山湾海域および新潟県以北海域においては、漁獲割合は増加しており、特に富山湾海域の漁獲割合の増加は顕著でした。これは、日本海において、サワラの分布が以前に比べて北に偏ったことを示していると思われます。

以上述べてきましたように、1992年以降東シナ海の大中型旋網によるサワラ漁獲量が急減していること、旋網の単位努力量あたり漁獲量が低下していることなどから、現在同資源の水準は低く、資源動向は減少傾向にあるとされています。その一方で、日本海内ではその分布域の拡大とともに、漁獲量は増えています。ところが、現在のサワラの漁獲実態をみると、未成年主体に漁獲されていますので、漁獲開始年齢を上げ、産卵親魚を増加させることが低位水準のサワラ資源の回復に有効であるとされています(西海区水産研究所 2004)。したがって、日本海内でもサワラの漁獲量が増加しているからといって安心は禁物です。今後の漁獲量の推移を見守る必要があります。

八 海水温と漁獲量の関係

1980年から2001年までの日本海西区のサワラ漁獲量と、水深50mの水温年間偏差(平年水温を基準として、どれだけ差があるのか)を同じグラフ上に描きました(図11)。これを見ると、サワラ漁獲量が増加する前の1998年から、平年よりも高い水温が持続していることがわかります。

つまり、日本海で平年よりも高い水温が継続することによって、従来もっと南の温暖な海